

エチオピア南西部アリにおける老いと自立

野口真理子

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

Growing old and their way of independence in Aari, southwestern Ethiopia

Mariko Noguchi

Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

エチオピアでは、他のサハラ以南アフリカ諸国と同様に、60歳以上人口の約9割が農村地域に居住している。しかしながら、高齢者対象の社会福祉サービスや年金などの福祉制度は限定的で、農村に暮らす高齢者の多くはその恩恵を受けていない。国家による社会福祉サービスを即時には期待できない農村地域において、生業活動の状況はその人の生存に直接的にかかわっていると考えられる。高齢化に関する国家計画においては、農村では高齢者は親族の紐帯の中でケアされているという前提のもとづき、コミュニティの力を活用することが強調されている。農村において高齢者が実際にどのような生活を営んでいるか、ローカルなサポートがどのように働いているか、まずは現状をあきらかにする必要がある。

本発表では、エチオピア南西部アリにおける「自立した生活」とはどのような状態であるかを検討した上で、事例をもちいて当該地域における高齢者の生活状況について述べる。発表者は2008年から、アリの高齢者がどのように生業活動に従事しているか、ひとつの地区に居住する17人の高齢者を対象に、おもに聞き取りと参与観察をおこなってきた。

エチオピア南西部に居住するアリの人びとは、年長者のことをアリ語でガルトと呼ぶ。ガルトとは知識や経験が豊富な者や、儀礼の立会人も指し、文脈に応じて、単に暦年齢のみでは規定されない広い範囲を含むカテゴリーである。ガルトとは「仕事」をしない人びとだという声もあるものの、実際にはガルトの多くが農耕を中心とする生業活動に日々従事する。一方、「疲れたガルト」という表現があり、特に農耕や家事の活動を縮小させた人びとを指して用いられる。高齢者の老い衰えたイメージはこのような修飾語を伴ってはじめてガルトと関連づけられるのである。本発表ではガルトの生活の自立を、世帯構成や労働力配分に着目し検討する。

アリは夫方居住で、小規模な核家族世帯を構成する。息子が成長すると、父親と同じ住居で寝てはいけないとされる。息子は父親から与えられた土地に家を建て、別世帯を築く。独身の間は父親の家で食事をとり、父親の指揮のもと農作業をおこなうことも多く、その場合まだ自立したとはみなされない。生業と食生活の管理が自分の世帯で可能か否かが重視されているといえる。

多くのアリの人びとは、定住的な農耕を営み、自給度の高い生活を送っている。一般に、外畑と庭畑を組み合わせた農耕は、世帯間での共同に支えられている。近居の父・息子世帯による共同を基本としながらも、労働力が不足した場合には、血縁・姻戚関係以外の労働力を利用できる。生業活動において世帯間で共同関係をもつことはアリにおいて一般的で、労働力や土地、種を持ち寄るガラヤ、牛耕のための牛を出しあうカナージャといった共同労働が頻繁に利用される。実際に、多くのガルトがこれらの共同関係を活用して農耕に従事していた。

以上のことから、アリにおける「自立した生活」とは、自身の世帯を構え、世帯外の人びととの共同関係を活用しながら生業活動における労働力配分、調理等の食生活を管理することとみなすことができる。ガルトの生活の自立度に応じた、周囲の人びとのかかわり方の違いからは、ガルト個々人の生活状況やニーズが周囲の人びとに共有されていること、親族を中心とし、時にはそれを超えた紐帯の中でそのニーズに応じた対応がなされていることがあきらかになった。現状では、このような地域ぐるみのローカルなサポートは公的制度を頼らずに維持されている。しかし今後高齢者の割合が増加傾向や人口移動、世代間関係の希薄化などが進めば、このサポートシステムはうまく機能しなくなる可能性が高い。現状においても、特に親族の少ない高齢者は極度の貧困に陥る可能性が高いため、親族を超えたつながりをより強化・保護するような対策が求められるだろう。